

Ⅱ 評定尺度調査の分析結果

Ⅱ－１ 学部票結果の分析

Ⅱ－１－１ 全体的傾向

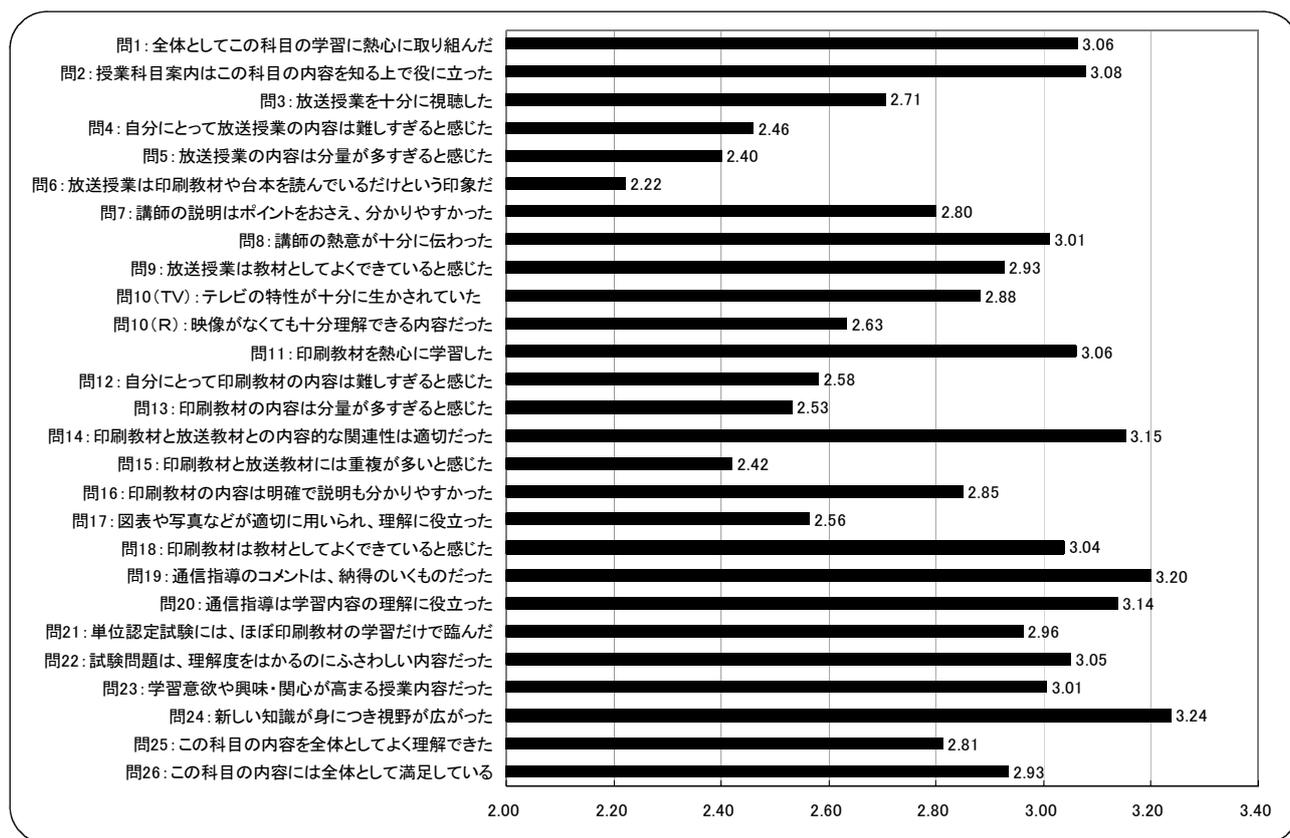
前年度の試行と異なり、今回の授業評価調査では、学部科目だけでなく大学院科目についても開設２年目の科目の学生による評価を行った。用いた調査票は、フェースシートの一部を除き概ね同一であるが、結果については一緒にして論ずることができないため、区別して見ていくことにしたい。まず初めに学部科目に関して見よう。

ここでは、はじめに全体的な傾向を知るため、評定尺度質問への回答状況を全回答者に関して見てみることにしたい。今回用いた評定尺度質問は、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の４段階のいずれかで答えるようになっているが、今回はそのそれぞれに４～１の点数を便宜的に振り、あくまで目安として平均点を算出してみた。もちろん、評定尺度の各カテゴリーに振られた「数字」を「数値」として加減乗除等の演算を行うことは、厳密に見るならば統計処理として適切でないことはいうまでもない。３が２よりもあてはまる程度が大きいことはいえても、４と３の間と３と２の間が等距離（つまり１の間隔）だという保証はどこにもないからである。しかし、巻末の付録（２）「平成１８年度学生による授業評価の調査結果（属性別クロス集計：全体）」を見ればわかるように、相対度数（パーセント）を選択肢ごとに示したのだけを見てそこから何らかの傾向を把握することは必ずしも容易ではない。したがって、ここでは、１～４の尺度を点数とみなし、その平均値を回答の傾向を推察するための目安として用いていくことにしたい。

各項目の評価の平均点の有効回答者全体の傾向を示したものが次頁の図１である。評価の平均値を見ると、問６、問５、問１５、問４の値が低く、内容の難しさや分量の多さに対する指摘がそれほど多くはないことがわかる。つまり、全体として見る限り、学部学生は内容の難易度と量をそれほど負担に感じていないということが窺えるのである。

一方で、平均値が高かったのが、問２４の「視野が広がった」等の全体的評価と問１９の「通信指導のコメント適切」感、そして問１４の「放送と印刷の関連適切」感、であった。問１９の結果にはやや意外な感じを持たれる向きもあろう。

図1 学部・項目別評価結果



また、問3の「放送授業を十分に視聴した」という項目の評価が若干低くなっている（2.71）。これはこれまでの調査でも重ねて指摘されてきた事実であるが、視聴の程度については学生側の特性との関連性も考えられるため、後で詳細に検討することにしよう。

ここで一つ、非常に特徴的な結果について触れておこう。それは、問10のメディア別の評価の違いについてである（上段の問10がテレビ科目の結果、下段の問10がラジオ科目の結果）。質問内容が若干異なるため完全に比較することは困難であるが、全体の数値だけから見ても、テレビ科目でのメディア特性を活かした内容への評価は平均的であるが（2.88）、ラジオ科目の映像がなくても理解しやすかったか、に関する評価は低い（2.63）。ラジオ科目の場合、内容あるいは教授法に一定の課題を残しているといえるのではないだろうか。

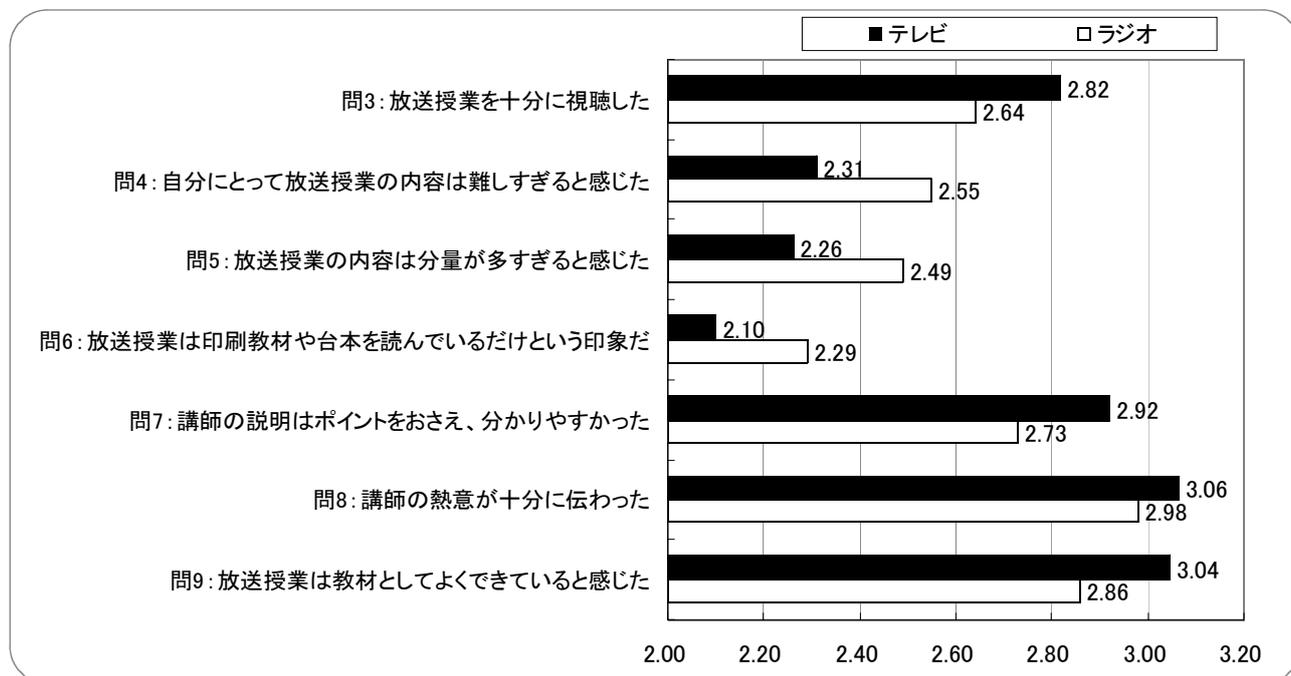
Ⅱ－1－2 項目別の結果

(1) 放送授業に関する評価結果

調査票の質問は、前にも述べたように、①全体的な学習への取り組み状況、②放送授業への評価、③印刷教材への評価、④通信指導と単位認定試験に関する評価、そして⑤全般的評価の5つのグループにまとめられている。以下、その区分にしたがって見ていくことにしたい。まず、メディア

別に問 3「放送授業を十分に視聴した」から問 9「放送授業は教材としてよくできている」の結果を示したものが図 2 である。

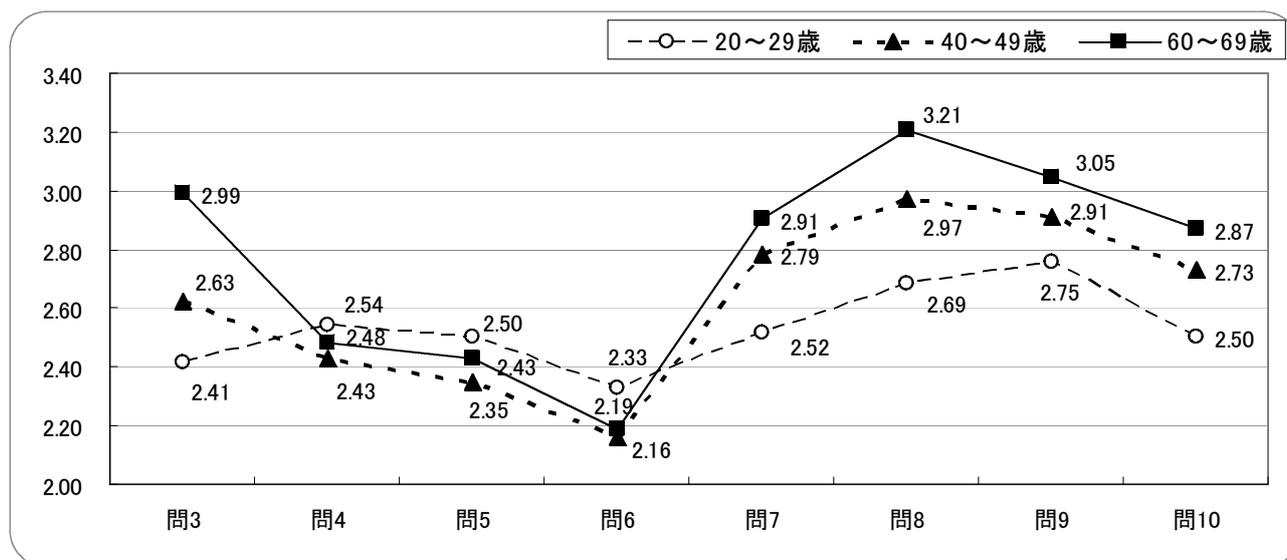
図2 学部・メディア別放送授業評価結果



問 3 では、テレビ科目の評点が 2.82 であるのに対し、ラジオ科目の評点は 2.64 となっている。つまりラジオ科目を受講している学生は何らかの事情によりテレビ科目よりも視聴時間が短い（または視聴回数が少ない）ということである。このことから、全体として、ラジオ科目が全体の視聴の程度を下げているものと判断することができる。問 4 の「難しさ」と問 5 の「分量」の評価に関しても、メディア別に見ると大きな違いが出ている。つまり、ラジオ科目はテレビ科目に比べて、明らかに「難しすぎる」「分量が多すぎる」と感じられているということである。また、問 6 「放送は印刷教材や台本を読んでいるだけと感じた」も、全体に低い値ながらラジオの方がその指摘が多いことがわかる。

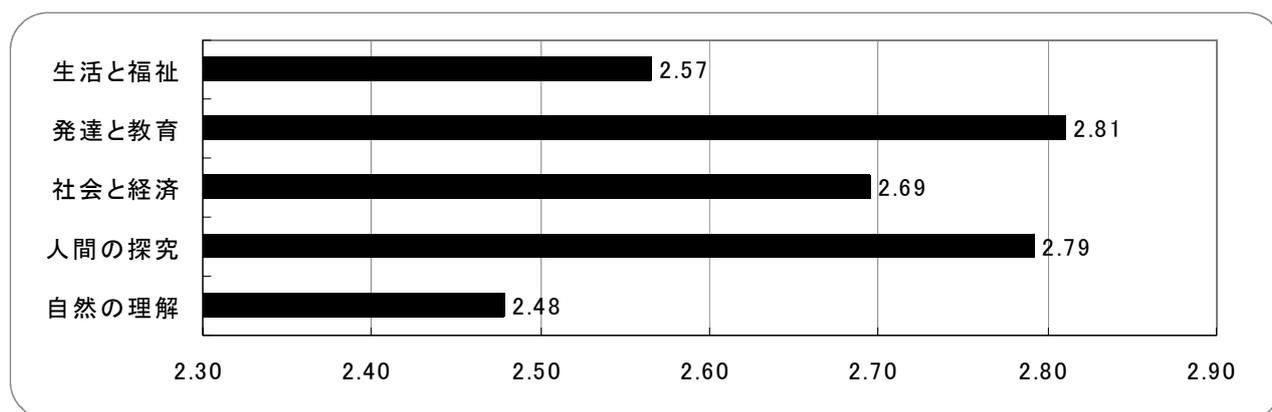
さらに、問 7 の「講師の話のわかりやすさ」や問 8 の「講師の熱意が伝わった」でも、全体平均から見ればテレビ・ラジオともに高い値を示しつつも、いずれもラジオ科目よりテレビ科目の評点の方が高い。このグループの最後の問 9 「放送は教材としてよくできている」は、放送授業の総合評価ともいふべき項目だが、ここでもテレビ科目が高い評価を得ていることがわかる。こうした点から、ここでも、ラジオ科目には説明のわかりやすさ及び印刷教材の理解への寄与に関してかなり構造的な課題があることが推察されるのである。

図3 学部・年齢階層別放送授業評価結果



放送授業の評価結果を3段階の年齢階層別に示したものが図3である。図を見ると全体を通して年代が高くなれば高くなるほど肯定的な評価が行われていることが確認できる。散らばりの大きさで見ると、問3「十分に視聴した」と問7「講師の話のわかりやすさ」と問8「講師の熱意が伝わった」に関して年代による散らばりが大きいことがわかる。それに比して、問4から問6は難易度や分量などに関する問であるが、年齢ごとの評価のばらつきはそれほどでもない。高齢者ほど放送授業をコミュニケーション機会と意識する度合いの高いことが窺える結果である。

図4 学部・科目の所属専攻別「問3：放送授業を十分に視聴した」の評価結果

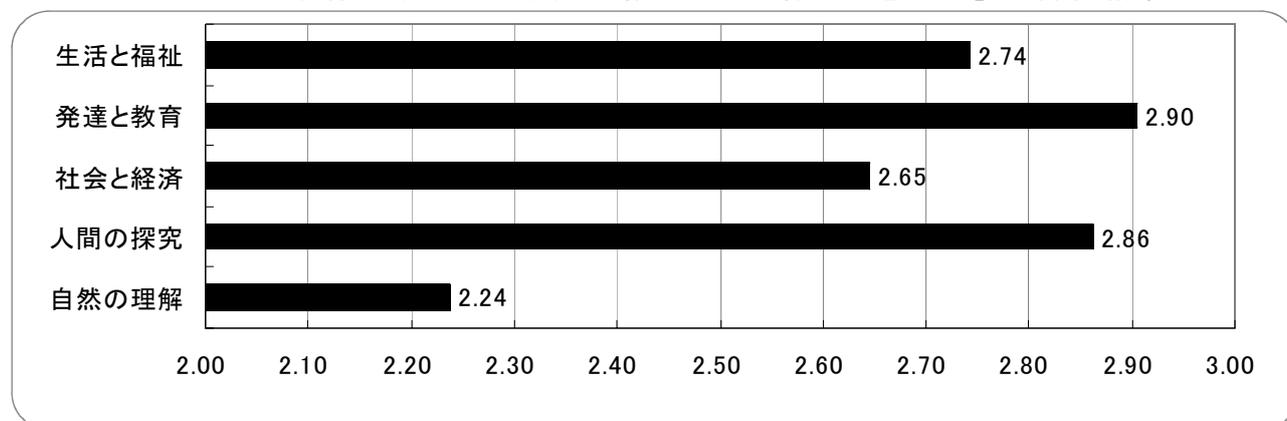


さらに問3について、科目の所属専攻別に見てみると（図4）、「自然の理解」の数値が最も低く、次いで「生活と福祉」の平均が低いことがわかる。これについては、授業の放送時間帯、対象科目の特定分野への偏りなどさらに細かく分析してみなければ分からないところもあるが、自然の理解の所属学生には比較的若い会社員等の層が多く、「生活と福祉」の所属学生には現職の看護師が多いこと、また、「発達と教育」には専業主婦・

パート層が多く、人間の探究には退職後の高齢者が比較的多いことなども関係していると思われる。

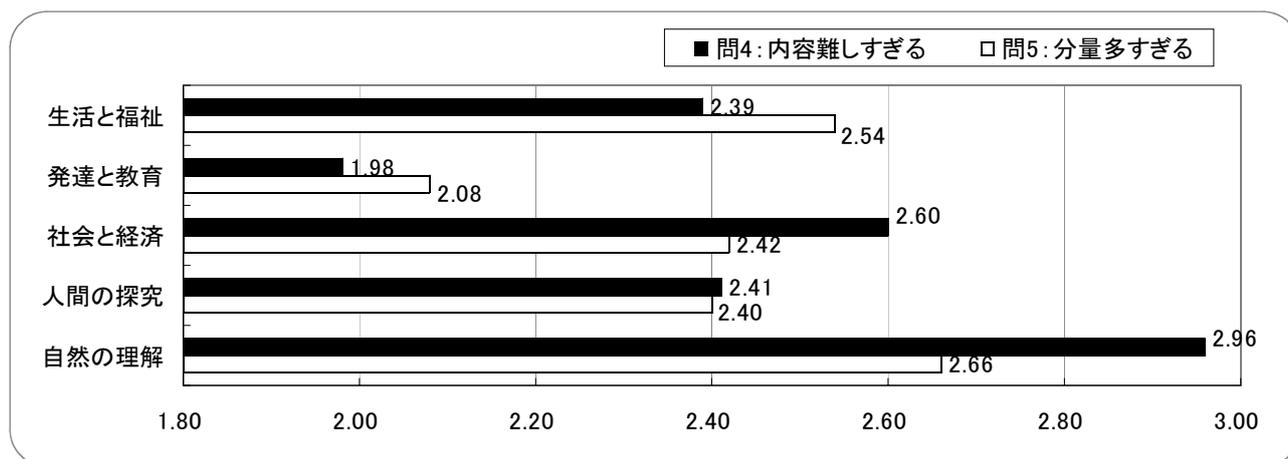
一方、年代によって比較的評価が散らばらなかったのが問 10「テレビまたはラジオに適した内容」という評価のうち、ラジオ科目に対する評価である。しかも、その評価が低い点で分散していないということを考えると、あらゆる年代でラジオ科目の内容については否定的な評価が下されているということになろう。これについても科目の所属専攻別(回答者の所属専攻別でないことに注意)に見てみると(図 5)、最も値が低いのが「自然の理解」の科目平均(2.24)で、次いで「社会と経済」の科目平均(2.65)である。特に、対象科目の4分の3がラジオ科目であった「自然の理解」での値の低さを見ると、これまでも言われてきたことではあるが、理系科目に関してはラジオでの講義の提供が不向きであるという結論を導き出さざるを得ない。当然のことではあるが、教科の内容と特性によって適切なメディアを選択することの重要性を改めて認識させられる結果だといってよいだろう。

図5 学部・科目の所属専攻別「問10:(TV)テレビの特性が十分に生かされていた or (R)映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」の評価結果



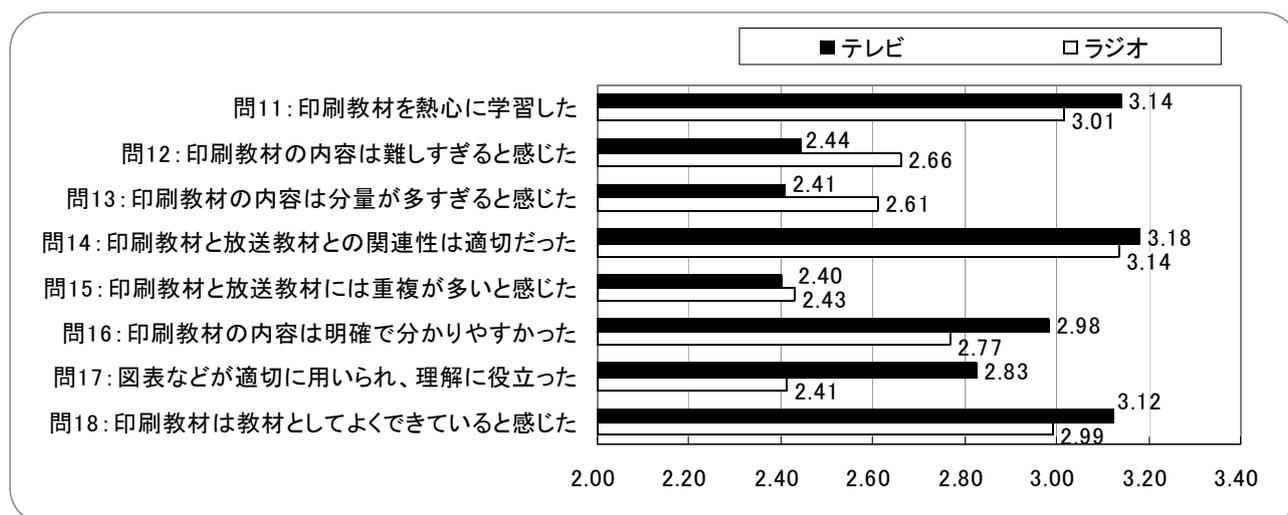
この項の最後に、放送授業の内容の難しさと分量に関して科目の所属専攻別に見ておく(図 6)。まず、問 4の「内容の難しさ」に関しては、「自然の理解」に所属する科目が際だって高い数値を示している。次いで「社会と経済」に所属する科目の数値が高い。「生活と福祉」は、難易度はそれほどではないものの、分量に関する数値が高い。難易度に比して分量が多いという、「生活と福祉」専攻の科目の特性がよく表れているといえよう。

図6 学部・科目の所属専攻別問4、問5の評価結果



(2) 印刷教材に関する評価結果

図7 学部・メディア別印刷教材評価結果



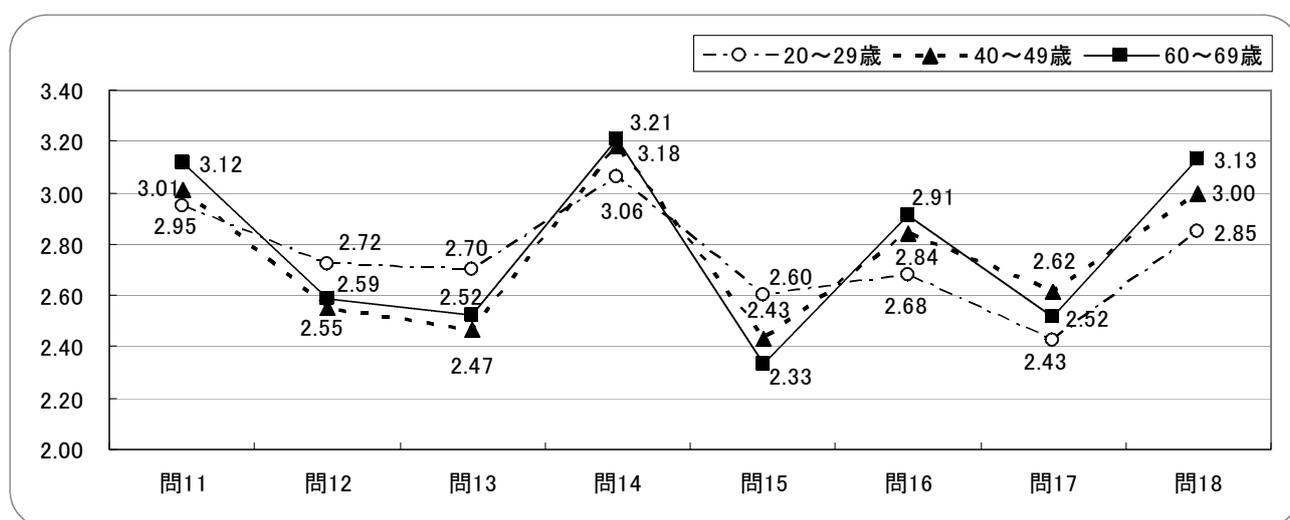
次に印刷教材に関する評価結果を見ていくことにしよう。メディア別に印刷教材の評価結果を示したものが図7である。

評価結果がメディア別に見て大きく異なるのは、問17「図表等の使用が適切」に関する評価である。圧倒的にテレビ科目(2.83)の方がラジオ科目(2.41)よりも評価が高い。0.4以上の差が確認できる。先の放送授業に関する評価結果と合わせて考えると、ラジオ科目では授業で図表等の使用が不可能である分、印刷教材での図表等の使用に対する期待も大きく、その分厳しい評価がなされた可能性もある。しかし、実際に両者の印刷教材を比較してみると、確かにテレビ科目の方が図表、図版、写真等が豊富である。このことは、テレビの場合は放送で用いた図版や図表をそのまま利用できるという教材作成の方法的な違いにも由来しているのかもしれない。さらなる検討を要するだろう。

他の質問項目では、問 12、問 13、問 16 といった印刷教材の難易度、分量、分かりやすさに関してもメディア別に有意な差が認められた。放送にどちらのメディアを用いようと印刷教材には基本的な差異はないはずであるが、こうした結果が出るところに、両教材の有機的な関わりを見ることができるのではないだろうか。

印刷教材の評価結果を 3 段階の年齢階層別に示したものが図 8 である。図を見ると放送授業のときと同様に全体を通して年代が高くなれば高くなるほど肯定的な評価が行われていることがわかる。散らばりに注目して見ると、多くの項目で 60 代と 40 代が近似した値をとるのに対し、20 代がそれとは違った値を示すことがわかる。活字メディアに対する世代間の親和性の差が出ていると見ることもできるかもしれない。

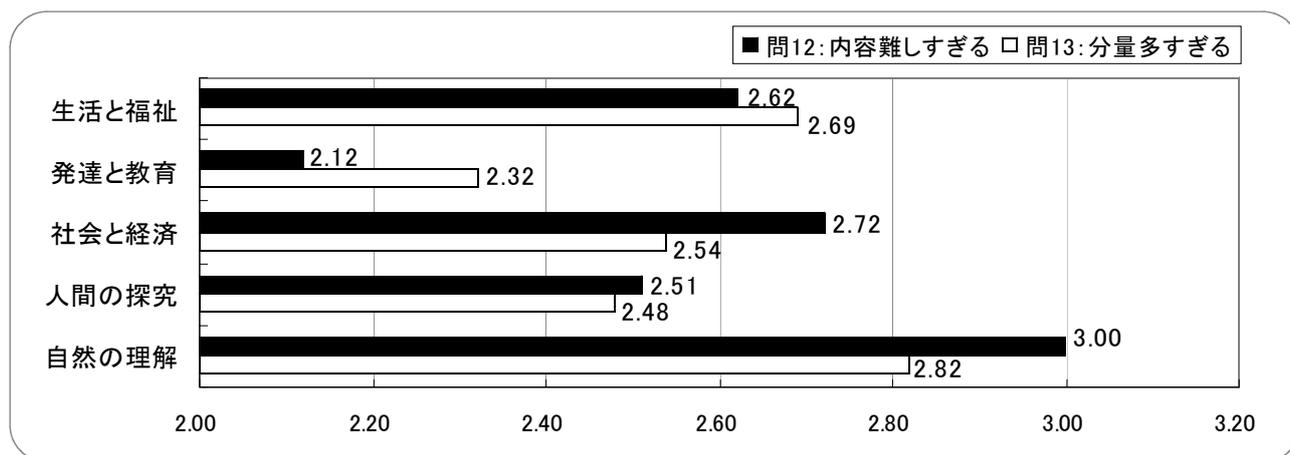
図8 学部・年齢階層別印刷教材評価結果



年代による散らばりが大きくなっているのは、問 12 と問 13 の「印刷教材の内容の難しさ」と「印刷教材の分量の多さ」、および問 15 の「放送教材との重複」を指摘するものであった。一方、年代による散らばり方が比較的小さかったのは、問 11「熱心に学習」、問 14「放送教材との関連適切」、そして問 17 の「図表等の使用の適切さ」である。こうした事実関係に関わる項目については、年代による違いが起こりにくいかもしれない。

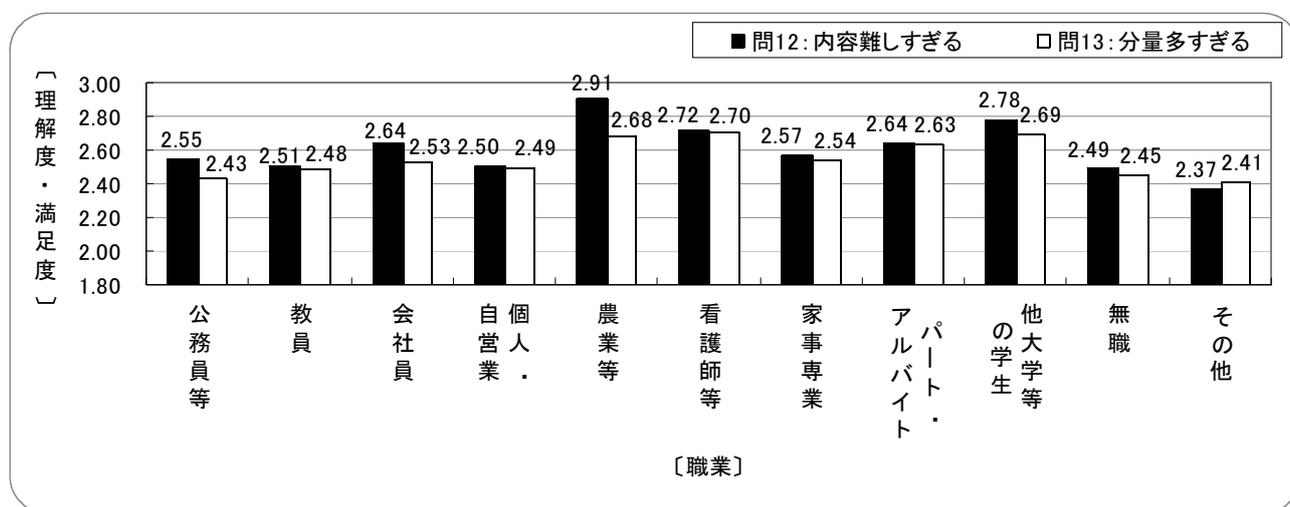
年代間の差異の大きかった印刷教材の内容の難しさと分量に関して、科目の所属専攻別に見たものが図 9 である。放送授業の場合と同様、「自然の理解」に属する科目について内容の難しさと分量の多さの指摘が多い。次いで「社会と経済」、「生活と福祉」の評点が比較的高いといえる。一方でやはり「発達と教育」に関してはどちらの問も指摘が少なく、印刷教材・放送授業ともに内容・分量にそれほど不満がないものと理解できる。

図9 学部・科目の所属専攻別問12、問13の評価結果



さらに細かく検討するため印刷教材の内容の難しさと分量に関して職業別に見たものが図10である。同一職業グループ内での問12と問13の評価は、農業等および他大学等の学生を除いてそれほど差異はない。つまり問12の評価と問13の評価はその職業内で同調している。最も内容の難しさと分量の多さを指摘しているのは農業等と他大学等の学生カテゴリーに属する学生である。他大学等の学生については、内容や分量がその所属大学の水準と異なったり、あるいは単位数が必然的に増えたりということが学生に負荷をかけている可能性があるのではないだろうか。

図10 学部・職業別問12、問13の評価結果

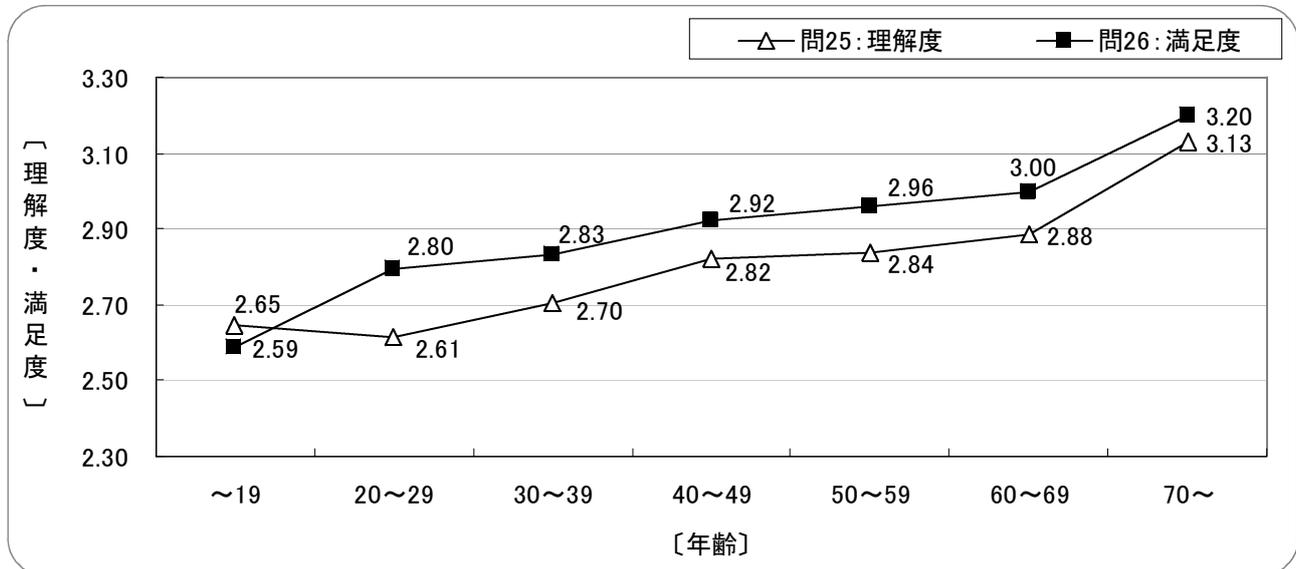


またそれ以外でも看護師等や会社員、パート・アルバイトなどが問12、問13について相対的に高い値であるのに対して、個人・自営業、教員、無職などでは低い値を示している。専攻の違いやとっている科目の差異など、さまざまな条件は考えられるが、印刷教材に親和性の高いグループ、低いグループがあり、そのことが評価結果に出てきている、ということだけは確かなようである。

(3) 学生の属性および特性との関連

以下では、学生の属性・特性と全体評価である問 25（理解度）と問 26（満足度）との関係を見ていく。

図11 学部・年齢と問25（理解度）、問26（満足度）の関係

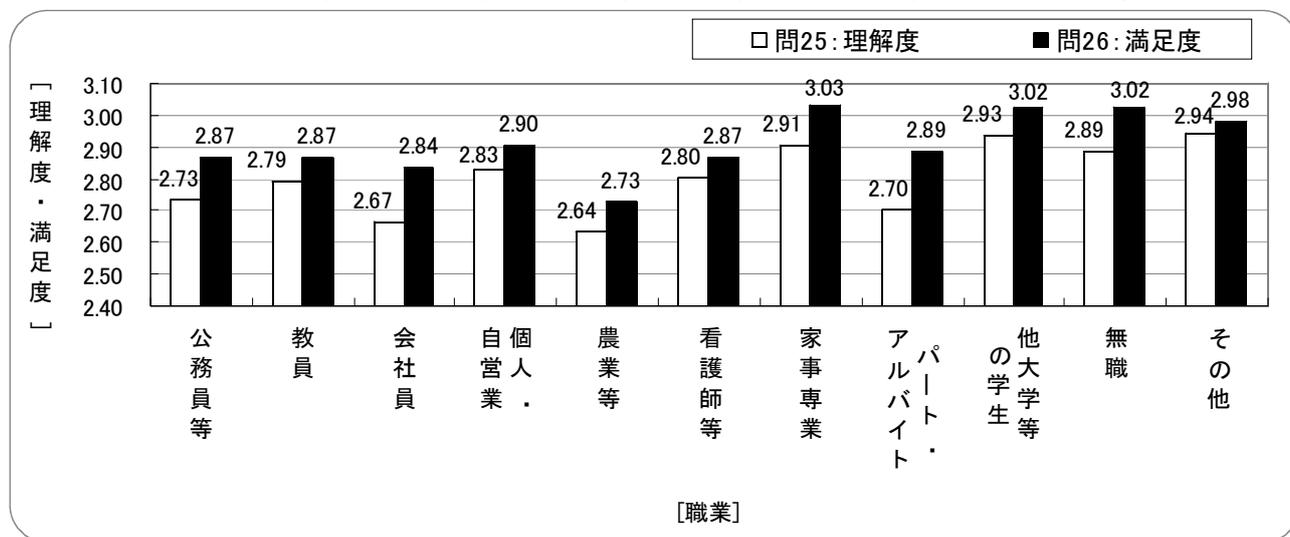


問 26 に関しては、満足度の指標として示しているが、問 1～問 26 の全体の平均値（付録(2)参照）と相関が 0.9 以上と非常に高いため、評価の全体的傾向を代替するものとしても考えることができる。年齢と問 25（理解度）、および問 26（満足度）との関係を表したものが図 11 である。一見して明らかであるのは、やはり年齢が高くなるにつれて理解度・満足度ともに肯定的な評価になるということである。10 代に関しては前述のとおり回答者数が非常に少なく（17 名）その影響も考えられるが、20 代と 60 代を比べても理解度は 2.61 → 3.13（+ 0.52）、満足度は 2.80 → 3.20（+ 0.40）のように著しく上昇している。その背景には多くの要因が考えられるが、年代と共に理解力が高まるという仮説を採らないとするならば、例えば、時間的余裕との相関や肯定的回答への指向性の差、あるいは時間的余裕とも関わるが、理解できそうな科目しか選択しないという態度を取れるか否かの違い等々の事由を挙げることは可能であろう。さらに検討を要する結果である。

ついで、職業別に問 25（理解度）および問 26（満足度）を見たものが図 12 である。図を見ると、家事専門の理解度・満足度が高く、他大学等の学生および無職の理解度・満足度がそれについていることがわかる。それに対して、農業等では、理解度・満足度ともに著しく低くなっている。会社員とパート・アルバイトの理解度の低さも気になるところである。これらの項目に関しては、昨年度の試行結果とは若干異なるデータとなって

いるが、職業的な特性が理解度・満足度の評価に大きな影響を依然与え続けていることは確かなようである。

図12 学部・職業別問25（理解度）、問26（満足度）の評価結果



性別と問25（理解度）、問26（満足度）の関係を表したものが図13である。理解度・満足度ともに女性が若干肯定的な評価をしているが、満足度を含め男女間に見るべき有意な差はない。また、学生種別と問25（理解度）、問26（満足度）の関係を表したのが図14である。全科履修生、選科履修生、科目履修生では若干選科履修生の理解度・満足度が高く、科目履修生の理解度・満足度が若干低いことが見て取れる。

専攻別に見ると（図14）、「人間の探究」に所属する学生の理解度・満足度が相対的に高く、「発達と教育」に所属する学生がそれに次いでいる。それに対し、「産業と技術」「自然の理解」「社会と経済」の理解度と満足度が相対的に低い。これまでに実施された類似の調査では、「産業と技術」と「自然の理解」の理系の学生の評点が低いことが指摘されていたが、今回の調査でも同様の結果が出たことになる。

図13 学部・性別問25（理解度）、問26（満足度）の評価結果

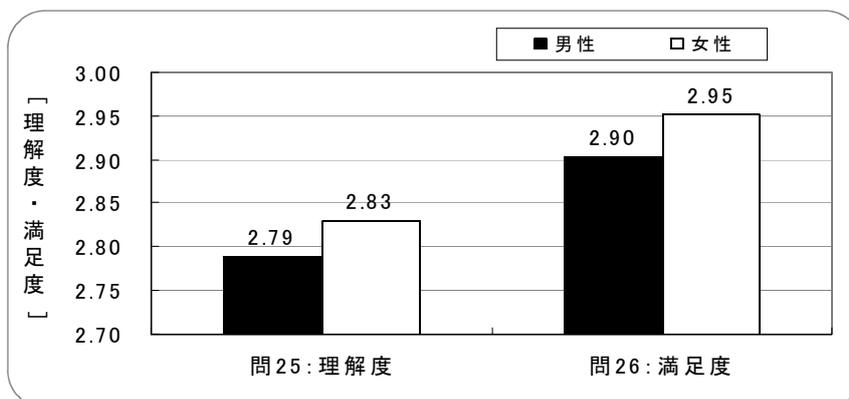
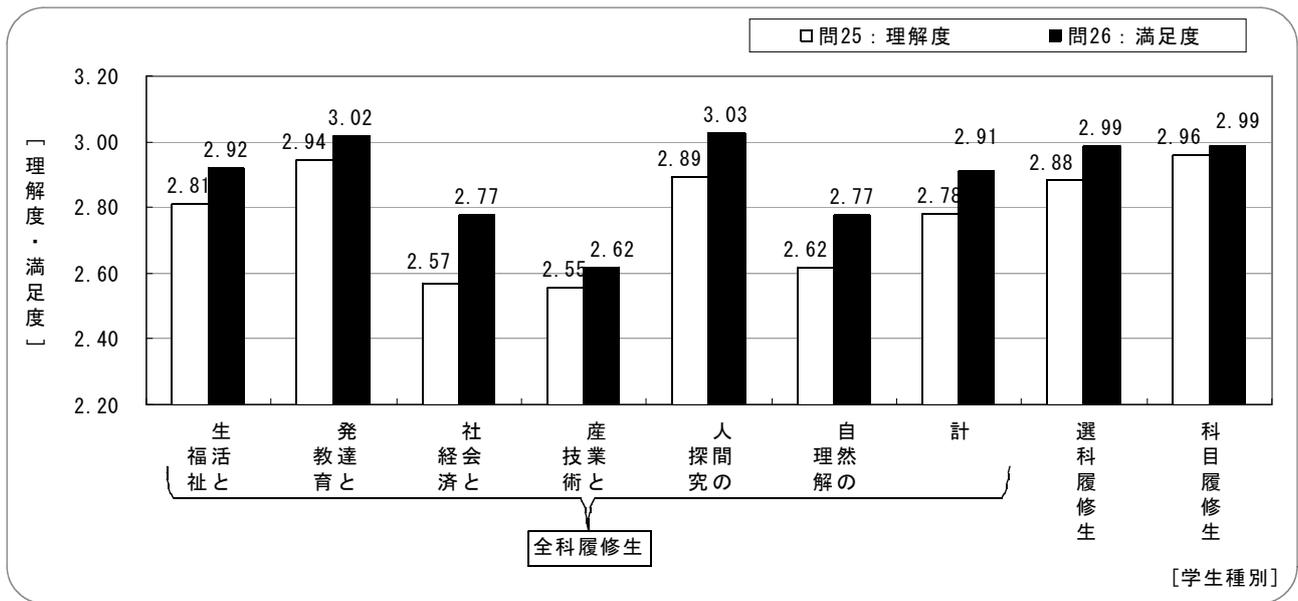


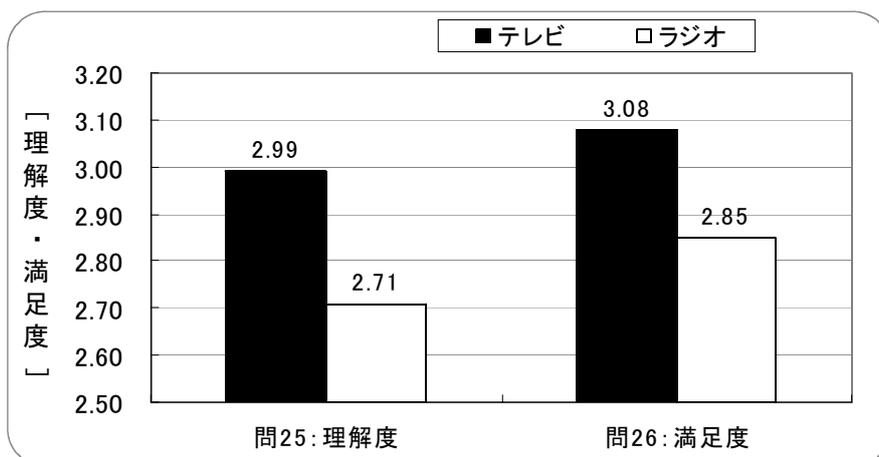
図14 学部・学生種ごとの問25（理解度）、問26（満足度）の評価結果



(4) 科目特性との関連

学部科目の検討の最後に、メディアと科目の所属別に理解度・満足度を見ていく。まず、メディア別に問25（理解度）、問26（満足度）の関係を表したものが図15である。理解度・満足度ともにテレビ科目のほうがラジオ科目よりも上回っている。理解度に関しては0.28、満足度に関しては0.23の差が生じている。昨年度の試行では、メディアによる有意な差異は見られなかったが、今後の結果を注視していくべきであろう。

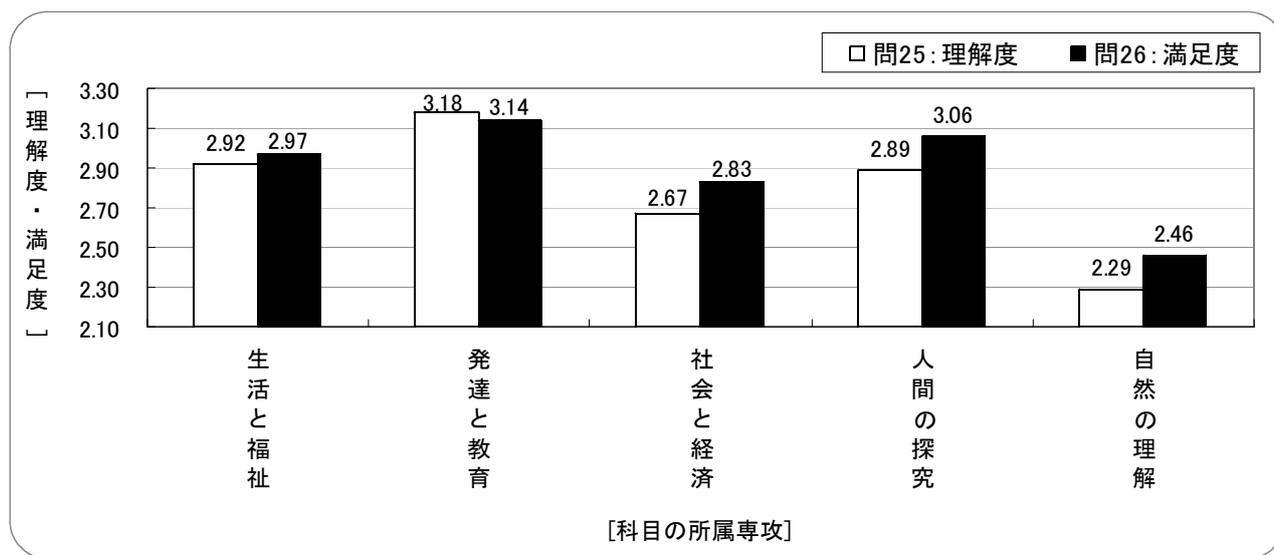
図15 学部・メディア別問25（理解度）、問26（満足度）の評価結果



次に科目の所属専攻に注目しよう。問25（理解度）、問26（満足度）を科目の所属専攻別に示したものが図16である（図14が回答者である学生の所属であるのに対し、この図は科目の所属を示していることに注意）。まず理解度に注目して見てみると、「発達と教育」と「生活と福祉」の科

目平均が高い一方で、「自然の理解」と「社会と経済」では低いことがわかる。満足度に関しては「発達と教育」と「人間の探究」の科目平均が高く、理解度と同様「自然の理解」と「社会と経済」で低くなっている。両項目に関する「自然の理解」の数値の低さは際立っている。特に理解度が著しく低いことから、難しさが満足度の低さにつながっていると見ることができよう。

図16 学部・科目の所属専攻別問25（理解度）、問26（満足度）の評価結果



Ⅱ－２ 大学院票結果の分析

Ⅱ－２－１ 全体的傾向

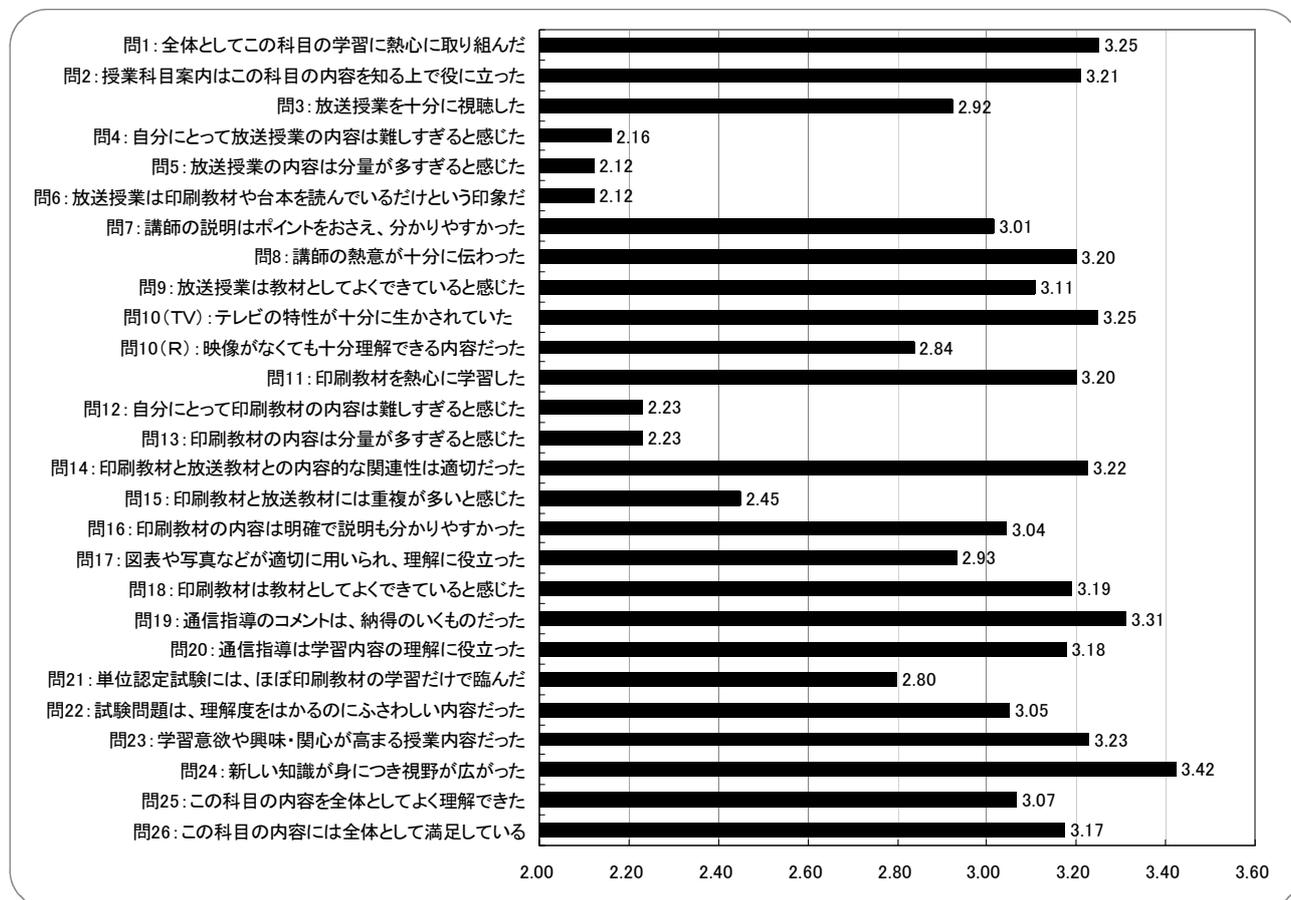
ついで、大学院科目に関する授業評価結果を見よう。本学では、修士選科生または修士科目生として登録すれば、誰でも大学院科目を受講できるため、必ずしもいわゆる「院生」が回答しているとは限らない。したがって、大学院生を対象とした評価結果よりも、学部生にシフトした意見になっている可能性がある。そのことを念頭に置いた上で、以下の結果を見ていただきたい。

大学院科目に関しても、まず項目別の平均値を俯瞰し、全体的な傾向を把握することにしよう。各項目の評価の平均点の有効回答者全体の傾向を示したものが図17である。評価の平均値を見ると、学部科目の場合と同様に、問5、問6、問4、問15の値は低いが、学部科目では印刷教材の内容の難しさや分量の多さ(問12、問13)を指摘する声がある程度あったのに対し、大学院ではその値が極めて小さいことも見て取れる。つまり、全体として見る限り、大学院生は学部学生と比べても本学の授業内容の難易度と量をそれほど負担に感じていないということが見て取れるのである。

一方で、値の高かったのが、問24の「視野が広がった」等の全体的評

価と問 19 の「通信指導のコメント適切」感、問 10 の「テレビ科目の適切」感、そして問 14 の「放送と印刷の関連適切」感、であった。学部の結果とほぼ一致する。通信指導のコメントは、学部科目よりも記述式の通信問題が多いことから、ある程度予想されたことである。

図17 大学院・項目別評価結果



また、問 3 の「放送授業を十分に視聴した」という項目の値は若干低い (2.92) が、それでも学部科目に比べれば 0.21 高くなっている。大学院科目の視聴状況は、明らかに学部科目よりも高くなっているのである。

問 10 のメディア別の評価 (上段の問 10 がテレビ科目の結果、下段の問 10 がラジオ科目の結果) の違いは、これも学部科目同様、テレビの方が高くなっている。ここでもラジオ科目の課題が学部科目と同様に見られるとあってよいだろう。

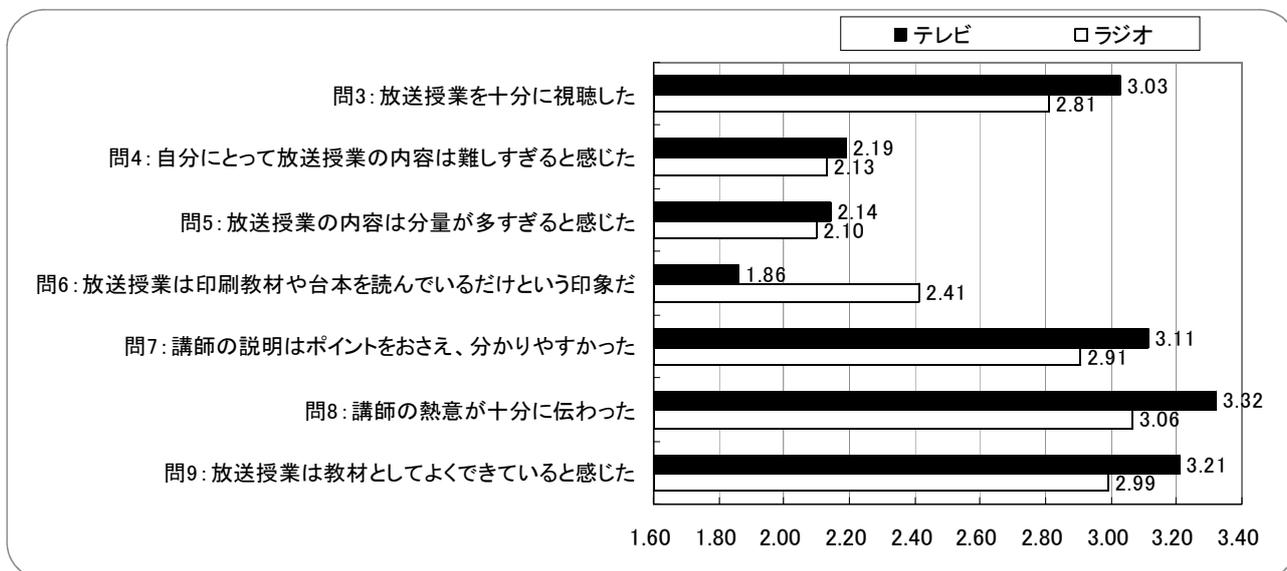
II-2-2 項目別の結果

(1) 放送授業に関する評価結果

大学院でも学部同様に、①全体的な学習への取り組み状況、②放送授業への評価、③印刷教材への評価、④通信指導と単位認定試験に関する評価、⑤全般的評価、の5つのグループごとに各質問項目をまとめながら見てい

くことにする。まず、全体的な取り組み状況と放送授業への評価を統合して、問3「放送授業を十分に視聴した」から問9「放送授業は教材としてよくできている」の結果をメディア別に図18で見よう。

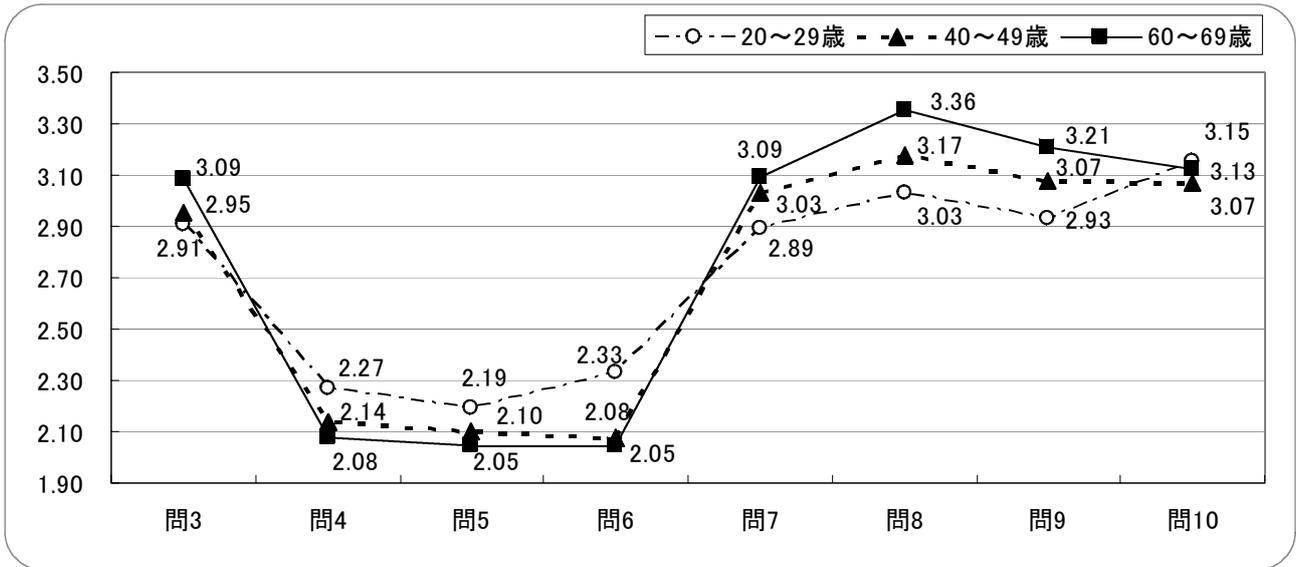
図18 大学院・メディア別放送授業評価結果



問3では、テレビ科目の評点が3.03と、学部科目に比しても高い水準であるのに対し、ラジオ科目の評点は2.81と0.21も低くなっている（ただし学部科目よりは高い）。つまり、ここでもラジオ科目を受講している学生は何らかの事情によりテレビ科目よりも視聴時間が短い（または視聴回数が少ない）ということが推測される。問4の「難しさ」と問5の「分量」の評価は、学部科目と異なり、メディアによる明確な差異は認められない。ところが、問6「放送は印刷教材や台本を読んでいるだけと感じた」では、テレビ科目に比してラジオ科目でその指摘がとりわけ多いことがわかる。

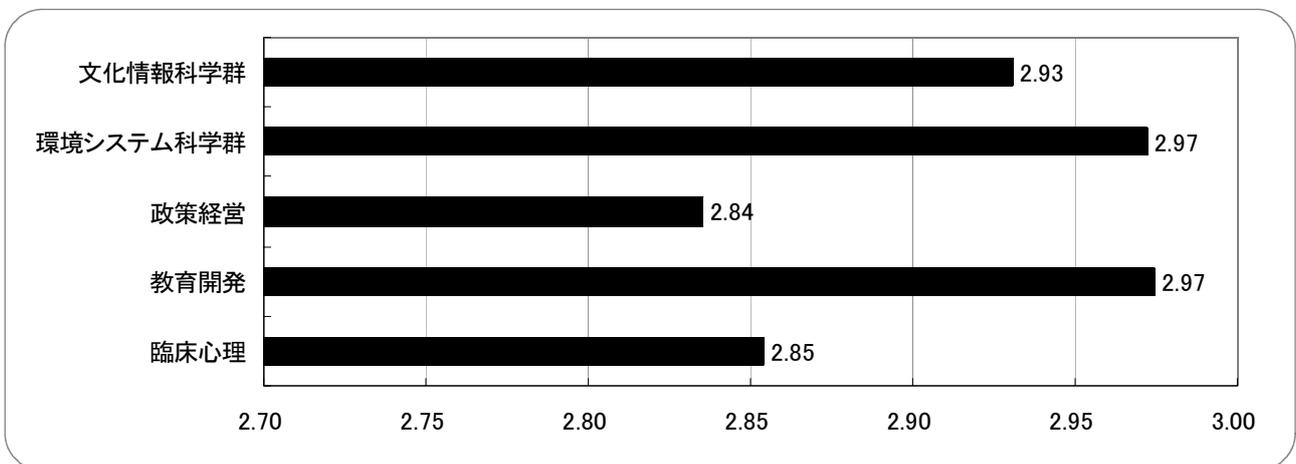
一方、問7の「講師の話のわかりやすさ」や問8の「講師の熱意が伝わった」でも、全体平均から見ればテレビ・ラジオともに高い値を示しつつも、いずれもラジオ科目よりテレビ科目の評点の方がやや高い。このグループの最後の問9「放送は教材としてよくできている」は、放送授業の総合評価ともいふべき項目だが、ここでもテレビ科目が高い評価を得ていることがわかる。こうした結果から、大学院科目に関してもラジオ科目の構造的な課題を見ることができるのである。

図19 大学院・年齢階層別放送授業評価結果



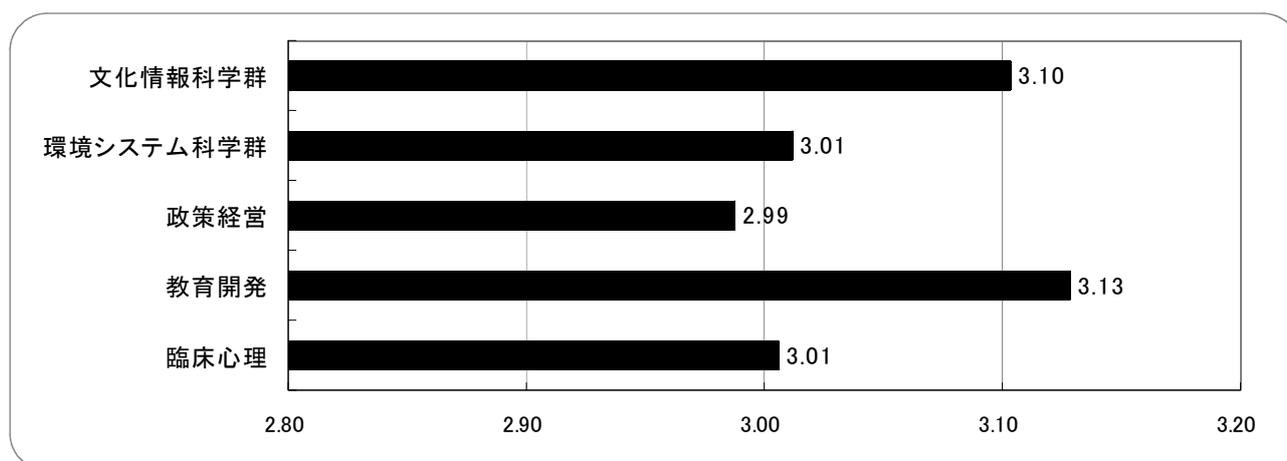
放送授業の評価結果を3段階の年齢階層別に示したものが図19である。図を見ると全体を通して年代が高くなれば高くなるほど肯定的な評価が行われていることが確認できる。散らばりの大ききで見ると、問6「放送は印刷教材や台本を読んでいるだけと感じた」と問8「講師の熱意が伝わった」に関して年代による散らばりが大きいことがわかる。

図20 大学院・科目の所属プログラム（群）別「問3：放送授業を十分に視聴した」の評価結果



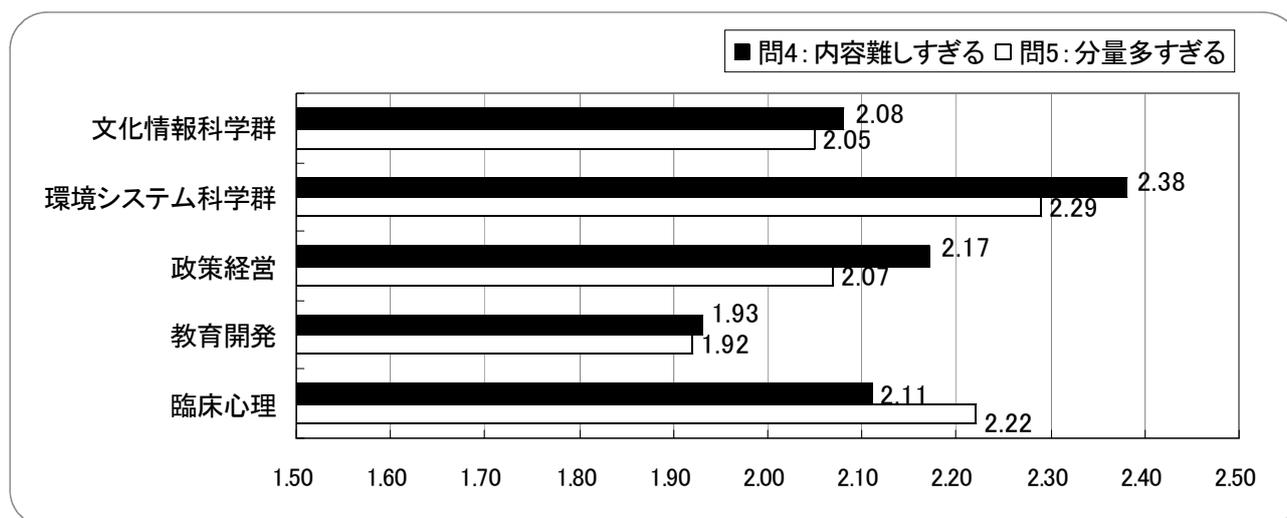
さらに問3について、科目の所属プログラム（群）別に見てみると、「政策経営」の数値が最も低く、次いで「臨床心理」の平均が低いことがわかる（図20参照）。また、「環境システム科学」や「教育開発」では視聴状況がいい。これについては授業の放送時間帯などさらに細かく分析してみなければわからないところもあるが、「政策経営」の所属学生には中堅の公務員や会社員等が多いということも関係しているのではないと思われる。

図21 大学院・科目の所属プログラム（群）別「問10：(TV)テレビの特性が十分に活かされていた or (R)映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」の評価結果



一方、年代による評価の違いがほとんどなかったのが問10「テレビまたはラジオに適した内容」という評価である。（もともと、その絶対値は学部科目よりかなり高い。）そこで、これについても科目の所属プログラム（群）別（回答者の所属プログラム（群）でないことに注意）に見てみると（図21）、最も値が低いのが「政策経営」の科目平均（2.99）で、次いで「環境システム科学」と「臨床心理」の科目平均（3.01）である。逆に「教育開発」と「文化情報科学」は高い水準を示している。こうした「政策経営」諸指標の低さの根底には、何か有意な要因があると考えられる。今後の検討すべき課題である。

図22 大学院・科目の所属プログラム（群）別問4、問5の評価結果

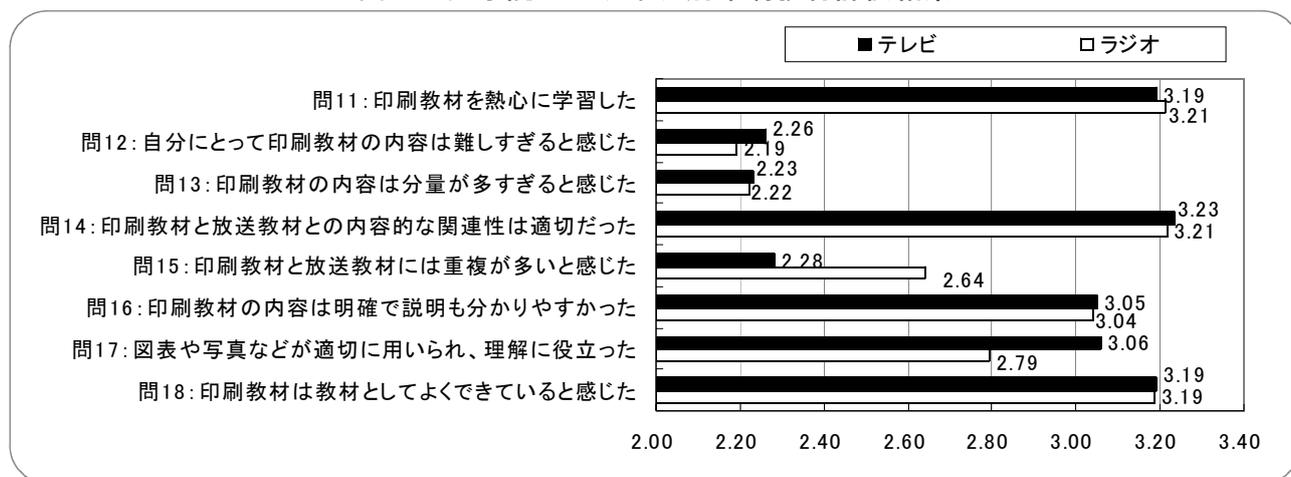


この項の最後に、放送授業の内容の難しさと分量に関して科目の所属プログラム（群）別に見ておく。まず、問4の「内容の難しさ」に関しては、「環境システム科学」に所属する科目が際だって高い数値を示している。次いで「政策経営」に所属する科目の数値が高いが、「環境システム科

学」との差は大きい。一方、「教育開発」では内容の難しさに関する指摘が著しく少ないが、これは、内容的な易しさよりも受講者の大半が現職の教員だということの方の効果が高いのではないかと思われる。「臨床心理」の科目は、難易度はそれほどではないものの、分量に関する数値が高い。難易度に比して分量が多いという臨床心理学の科目特性がよく表れているといえよう。

(2) 印刷教材に関する評価結果

図23 大学院・メディア別印刷教材評価結果

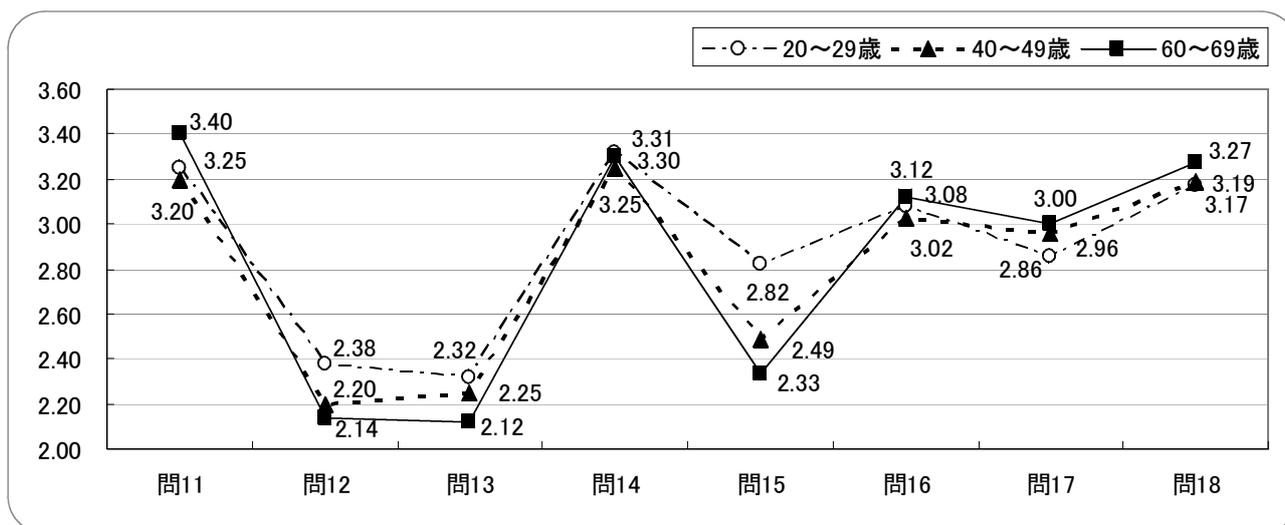


次に印刷教材に関する評価結果を見ていくことにしよう。メディア別に印刷教材の評価結果を示したものが図23である。

評価結果がメディア別に見て大きく異なるのは、問15「放送教材との重複」に関する評価である。テレビ科目とラジオ科目の差が0.36にも達している。学部科目では見られなかったこうした傾向は、学生による評価をすることで初めて知ることができたということである。問17「図表等の利用」は、学部科目同様、大学院科目でもテレビ科目とラジオ科目の印刷教材の間で大きな差が見られる。学部科目の場合と同じような背景が考えられるのではないだろうか。他の質問項目では、ほとんど有意な差は認められなかった。学部とのそうした違いの背景も考えておくべきであろう。

印刷教材の評価結果を3段階の年齢階層別に示したものが図24である。図を見ると放送授業のときと同様に全体を通して年代が高くなれば高くなるほど肯定的な評価が行われていることがわかる。散らばりに注目してみると、多くの項目で60代と40代が近似した値をとるのに対し、20代がそれとは違った値を示す点は学部科目と同様である。ただ、学部科目に比べて、年代による差異はそれほど大きなものではないという印象を受けるのも事実である。

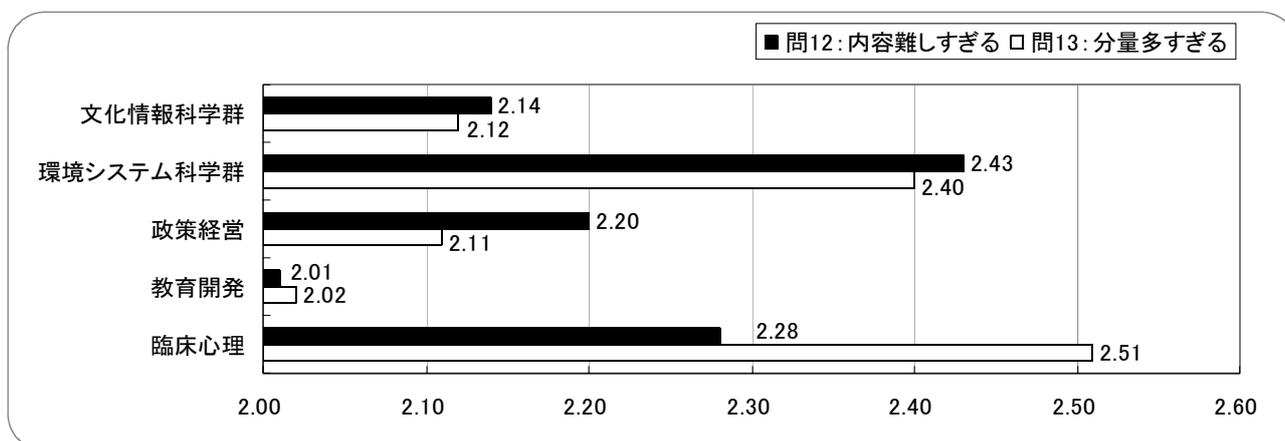
図24 大学院・年齢階層別印刷教材評価結果



項目の中で、年代による散らばりが大きくなっているのは、問15の「放送教材との重複」を指摘するものだけであった。この点は学部科目と大きく異なっている。重複に関しては、20代の学生が重複を強く感じるのに対し、60代の学生は、むしろそれを肯定的に捉える傾向すらある。このことは、後出の自由記述の内容を見ても明らかである。それ以外の項目では、学部科目と違って年代による散らばりは非常に小さい。その背景についても今後考察していくべきだと思う。

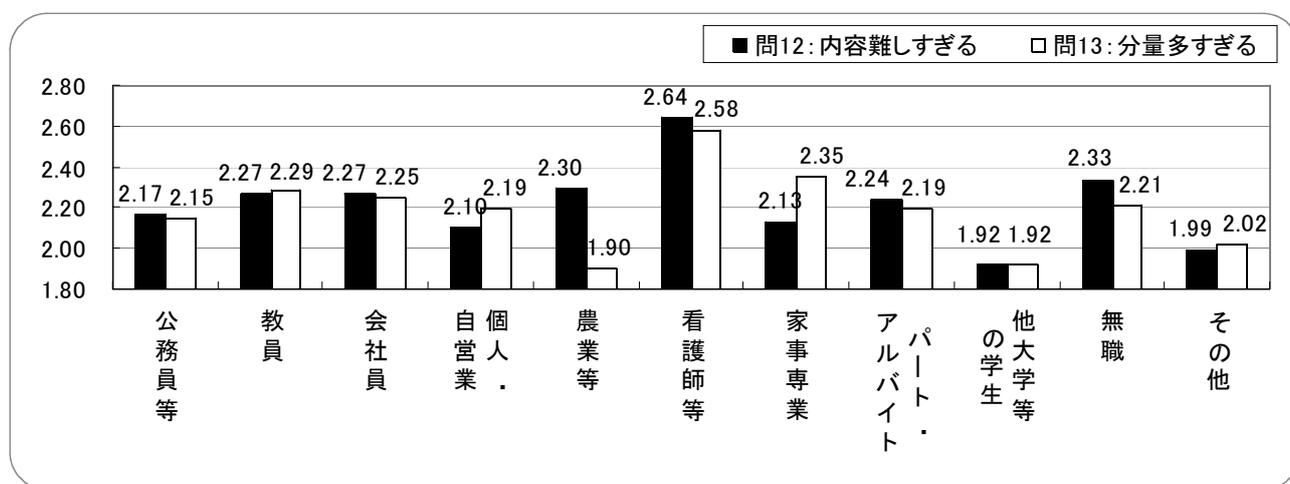
印刷教材の内容の難しさと分量に関して、科目の所属プログラム（群）別に見たものが図25である。放送授業の場合と同様、「環境システム科学」に属する科目について内容の難しさと分量の多さの指摘が多い。「臨床心理」がそれに続くが、その差は大きい。「臨床心理」で特徴的なのは、分量の多さに対する指摘が群を抜いていることである。これに関しては、放送授業(図22)でも全く同様の傾向を見ることができたが、印刷教材では、その差異の程度がいっそう著しくなっているのが目立つ。

図25 大学院・科目の所属プログラム（群）別問12、問13の評価結果



さらに細かく検討するため印刷教材の内容の難しさと分量に関して職業別に見たものが図 26 である。同一職業グループ内での問 12 と問 13 の評価は、農業等および家事専業を除いてそれほど差異はない。つまり、ここでも問 12 の評価と問 13 の評価はその職業内で同調しているといえよう。最も内容の難しさと分量の多さを指摘しているのは看護師等である。しかし、この結果は、科目の特性と職業との相性というより、その職業の内包する特殊な事情によるところが大きいのではないかと考えられる。というのも、看護師等や農業等、家事専業などの回答結果がそれを示唆しているように思えるからである。

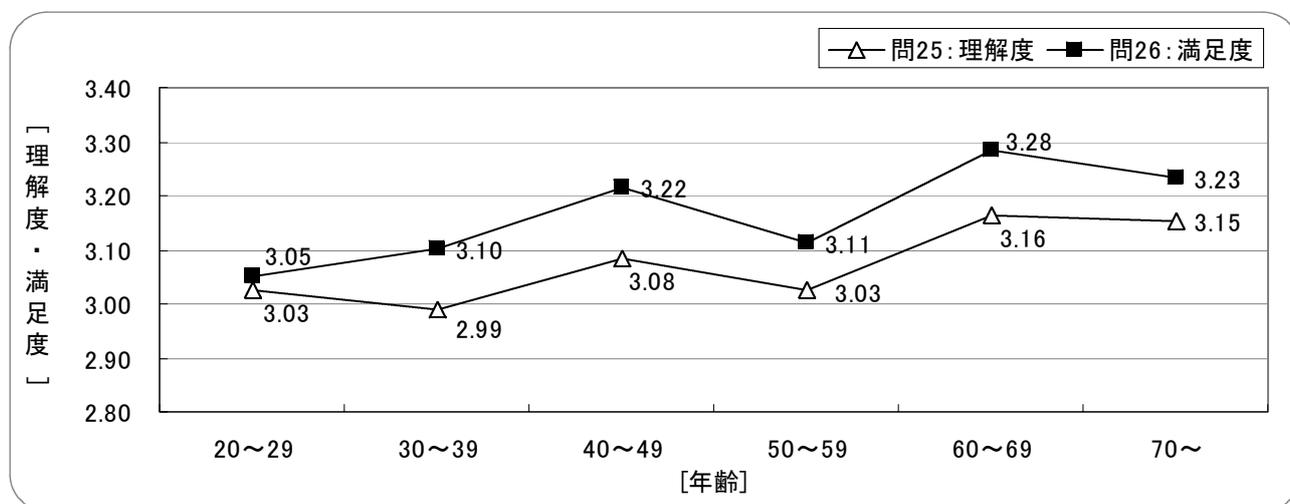
図26 大学院・職業別問12、問13の評価結果



(3) 学生の属性および特性との関連

以下では、学生の属性・特性と全体評価である問 25（理解度）と問 26（満足度）との関係を見ていく。

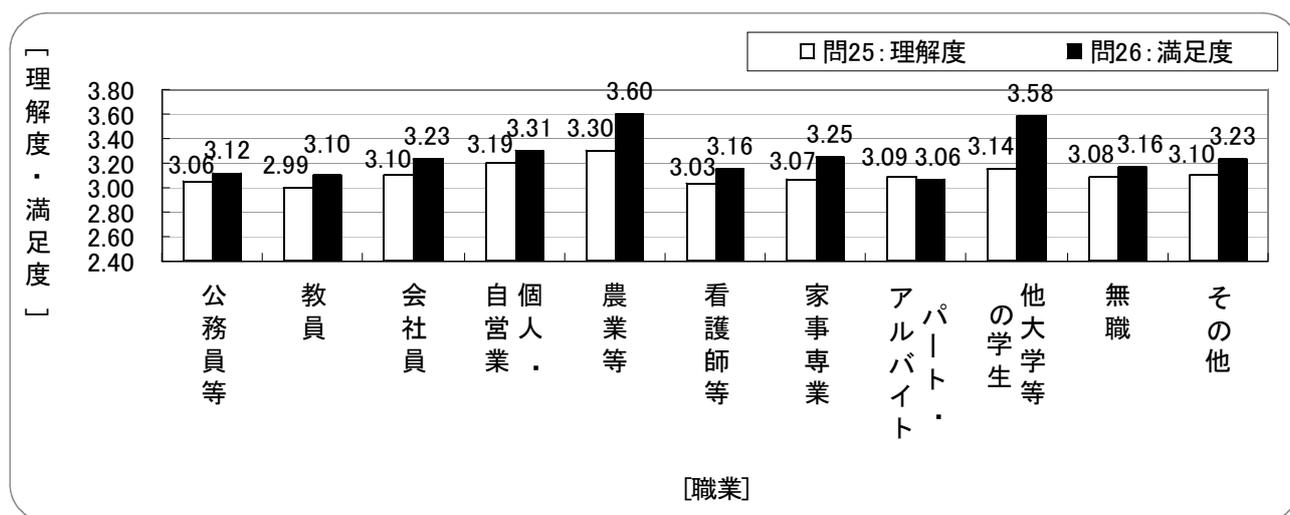
図27 大学院・年齢と問25（理解度）、問26（満足度）の関係



年齢と問 25（理解度）および問 26（満足度）との関係を表したものが図 27 である。一見して明らかであるのは、やはり年齢が高くなるにつれて理解度・満足度ともに肯定的な評価になるということであるが、学部科目の場合と異なり、その上がり方は変則的である。50代で一時大幅に低下しているのである。特に満足度の落ち込みは大きい。ここで何が起きているのか、この層にどのような特性の学生が多いのかは、今後詰めていくべき重要な問題であろう。

ついで、職業別に問 25（理解度）および問 26（満足度）を見たものが図 28 である。図 28 を見ると、農業等の理解度・満足度が高く、他大学等の学生および無職の理解度・満足度がそれについていることがわかる。自営業の値も高い。それに対して、教員、パート・アルバイト、家事専業などでは、理解度、満足度ともに低くなっている。このことは、学部科目の結果とは若干異なるものとなっている。その理由についてのさらなる考察が必要だろう。

図28 大学院・職業別問25（理解度）、問26（満足度）の評価結果



性別と問 25（理解度）、問 26（満足度）の関係を表したものが図 29 である。学部科目とは逆に、理解度、満足度ともに、はっきりと男性の方が肯定的な評価をしている。また、学生種別と問 25（理解度）、問 26（満足度）の関係を表した図 30 を見ると、「臨床心理」の理解度、満足度が群を抜いていることがわかる。「臨床心理」では、卒業までに数度の合宿形式の現地教育などを行うため、放送科目の理解度・満足度も増すのではないかと思われるが、今回はその関わりまでは残念ながら尋ねることはできなかった。「教育開発」も、理解度は同様に高いものの、満足度では 0.2 以上水をあけられている。一方、ここでも「政策経営」の理解度・満足度が低いのが気になる。

図29 大学院・性別問25（理解度）、問26（満足度）の評価結果

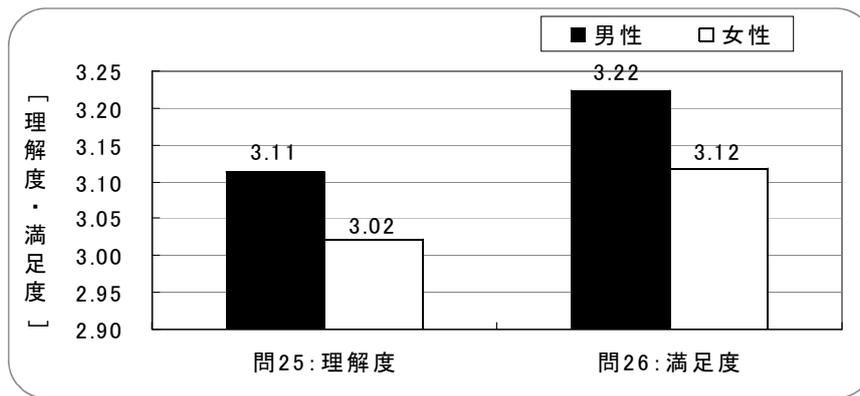
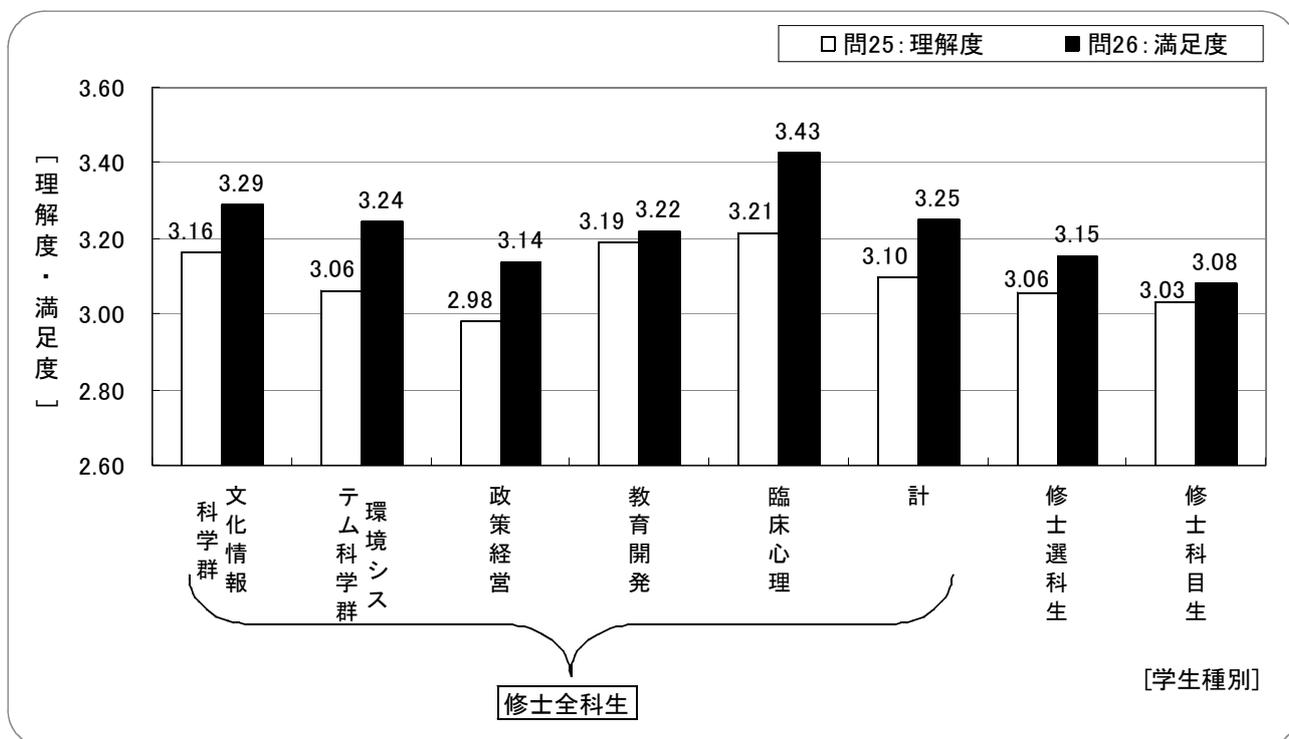


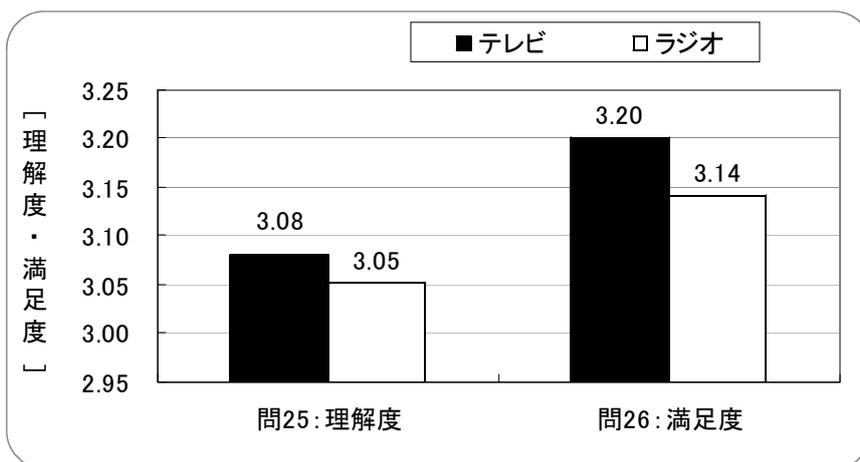
図30 大学院・学生種ごとの問25（理解度）、問26（満足度）の評価結果



(4) 科目特性との関連

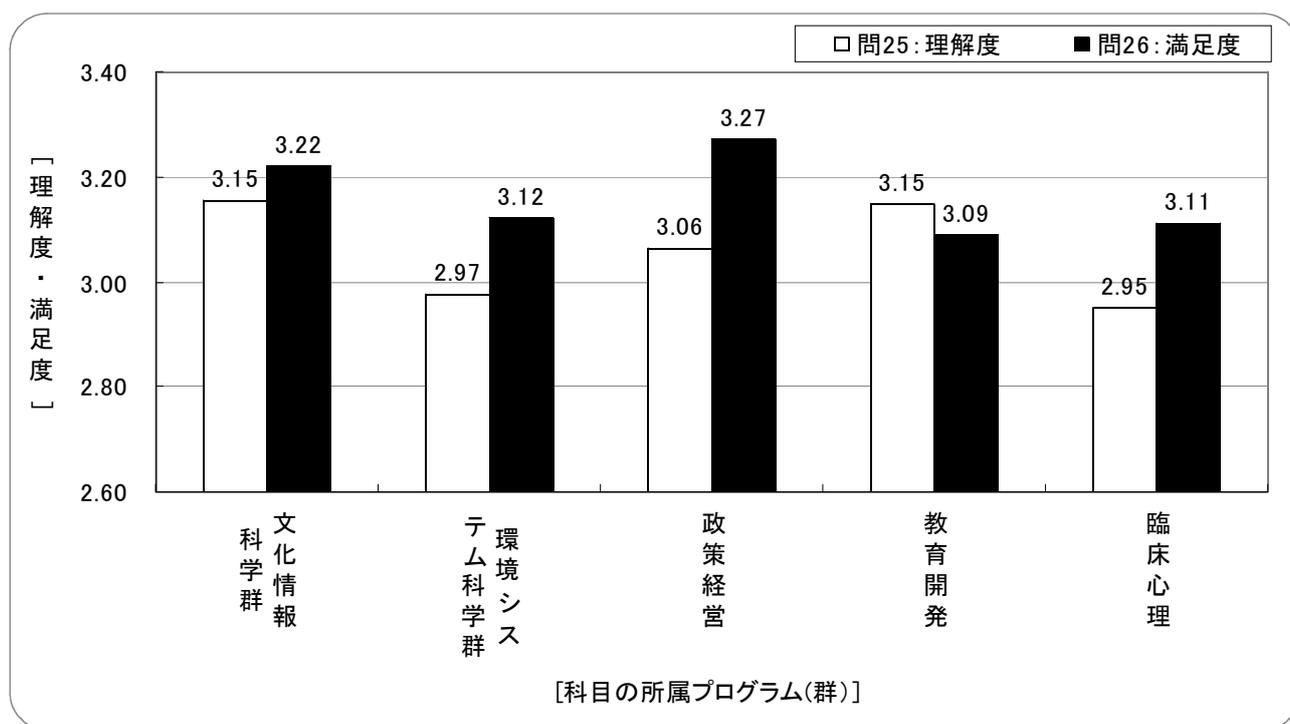
最後に、メディアと科目の所属プログラム（群）別に理解度・満足度を見ていく。まず、メディア別に問25（理解度）、問26（満足度）の関係を表したものが図31である。理解度・満足度ともにテレビ科目のほうがラジオ科目よりもやや上回っているが、その差は学部科目ほどではない（理解度の差は学部0.28に対して大学院0.03、満足度の差は学部0.23に対して大学院0.06）。学部と比べ、より内容的な関わりで理解度・満足度を判断するということであろう。

図31 大学院・メディア別問25（理解度）、問26（満足度）の評価結果



次に科目の所属プログラム（群）別に注目しよう。問25（理解度）、問26（満足度）を科目の所属プログラム（群）別に示したものが図32である。

図32 大学院・科目の所属プログラム（群）別問25（理解度）、問26（満足度）の評価結果



まず理解度に注目して見てみると、図30の学生の種別でも値の高かった「教育開発」と「文化情報科学」の科目平均が図32の科目の所属プログラム（群）別においても高い一方で、「臨床心理」と「環境システム科学」では低いことがわかる。とりわけ、学生の種別で評価の高かった「臨床心理」の値が低いことは注目すべきであろう。一方、満足度に関しては、いっそう特異な傾向を見ることができる。学生の種別ではあらゆる評価で低位であった「政策経営」の満足度が図32では、最も高くなっているのである。あえてその結果の意味を表現するならば、「政策経営」では、学

生に理解され、満足される科目を提供しているが、その所属学生の理解感、満足感は必ずしも高くはない、ということになるろうか。非常に興味あるパラドックスであると思う。